

下手でいい 下手がいい



絵手紙グループ

ボランティア最前線

下手でいい、下手がいい。誰でもが、気軽にできて、楽しく、奥が深いー。絵手紙の真骨頂だそうである。

8月12日、水の科学館での「ものづくりイベント」シリーズの

絵手紙教室に取材にうかがった。午前10時から午後3時まで開かれ、夏休み中の親子連れ、中学、高校生、若いカップル、障害者らが次々に訪れる。グループ〈わ〉文化部会の「絵手紙」代表の浅野禮子さん（国際5期）、岡崎ヒロミさん（福祉7期）、山田淑子さん（食文10期）は交代で昼食をとるほどだ。

ある家族連れは「おばあちゃん、ゆっくり元気になってね」と絵手紙に書いた。77歳のおばあちゃんは重篤で回復が望めず、「早く良くなってね」とは書けないのだろうか。そして別に「パパがんばって」とも。日ごろ、家族のために一生懸命、働く父親へのエールだろう。この家族の、相手を深く思いやる心が痛いほどわかる。

◆顔生き生き、絵筆持つ◆

どの子も、最初は「どう描こうか」ともじもじしているが、いざ描き始めると、顔がいきいきと輝き、楽しそうになる。自分で選んだ額縁代わりの台紙に作品を貼ると、一層、見栄えが良くなり、にっこりとほほ笑んで、大切そうに持ち帰る。

午後からは近くの障害者施設・神戸光有会の通所者3人が職員2人に付き添われてやってきた。浅野代表らとは顔なじみでニコニコと挨拶を交わす。1人は「夏だから柚子にする」と2、30分で仕上げた。上手なものだ。1時間、粘って描き上げた人もいた。

◆お手本、ハガキなど用意◆

浅野代表らは、絵手紙の手本3,40枚、はがき、手作りの色とりどりの台紙約80枚、絵筆、絵の具、水入れの牛乳パックなどを用意してきた。手本は夏らしくヒマワリ、トマト、トウガン、柚子など。参加者が思うように描けるよう気を配り、アドバイスは控え目。子どもたちは頭が柔らかく、発想が素晴らしい。「自分たちも遊んでもらっている。楽しませてもらっている」感じだそう。

絵手紙グループは平成12年結成、メンバーは5人。5期生の水彩画グループが絵手紙も勉強し、須磨区の老人保健施設でボランティアを始めた。口コミで活動が知られ、現在は福祉施設など7か所で活動している。先の光有会は昨年、月に1回、第3水曜日の午後2時から3時まで教える。最初は、1人か2人の参加者だったが、今は6、7人が定着している。休もうものなら「絵手紙があるから施設に通っているのに」といわれ、すごく励みになるという。

＝写真は8月12日水の科学館で

（取材・写真＝広報・永野 知己）